

母の歴史ヒストリー

2026年9月28日

ペースメーカー点検のため某病院で長時間待ち

母は自分の歴史を語りだした。それを聞いていた患者さんが

「あんたのおかあさん、何歳？記憶力がいいな。そして波乱万丈だったんだね。」
と言われた。

目力（めじから）がAI人形に負けないぐらい語った母のストーリー。

そして、私に続いていく。看護においてもその人のライフレビューは重要である。

苦労連続の人生 1

- 内田陽子の実母フタミは広島三次・畠敷の一番大きな赤瓦の家に生まれた。父は金持ちの五郎、母は庄原出身、正代。母は7歳の時に実母をなくし、その後父も亡くなった。残された4人兄弟（男、男、女、女の末っ子）とくに長男が良く働き（朝早くから牛を飼っていたので芝刈りなども含めて、田んぼ仕事等）、嫁を貰って農家を継ぐ。兄弟も手伝うが、家の居場所はなかった。
- 五郎と正代は結婚して5人の子を産むが、五郎は浪費家で一気に貧乏になり正代は苦労が絶えなかった。お金が入るとすぐに悪い仲間と豪遊。次女フタミは擦れた下駄を掃き、お弁当も持参出来ないくらい貧乏であった。帰宅途中に田んぼの人たちに挨拶を元気良くした。そうしないと陰口をいわれた時代だった。
- 長女姉さんは養女としてもらわれていった。盲目の継母に育てられ、魚屋を手伝う。長女もよく働き、ご飯は一番に継母に手渡しして敬った。しかし、姉さんが船乗りと結婚し、継母はやきもちがひどかった。姉さんは厳しく躰を受け負けず嫌いだった。姉さんとわかったのは、フタミが小学生のときだった。姉さんは、孫の親が離婚したため自分の子として育てた。
- フタミは長女の役割をもち、母を助けて、兄弟の面倒をよくみた。父はあいかわらず道楽者で贅沢をしたが、妻や子供に分けることはなかった。フタミは小学校もろくにいけなかった。しかし、金持ちの友達をもち、その子の本を借りてよく読んだ。近所の人もフタミは愛嬌があるとかわいがられた。
- 原爆投下時は母は幼かった。広島市内でなく三次にいたので被爆はしなかったが、親せきの人は被爆した。私ももしかしたら原爆の影響を受ける可能性はあり、他人事とは思えない。現在でも戦争の書籍を読み続ける。

苦労連続の人生 2

- 五郎は借金をして贅沢を続ける道楽者。フタミは父の借金のため、奉公に出された。友人は制服をきて学校に行くのに、自分は古い着物と下駄を掃いて奉公していたので、恥ずかしかった。
- 奉公の先は地元の医院。夜間の患者が来ると、診察室の準備をした。その子供をおぶって家事こなした。その子は夜もフタミと一緒にいたいとやってきた。また、どこかにつれてってくれとおんぶ紐をもってやってきた。その後、その子供が医師になり、老いた五郎の診療をしてくれた。その子をかわいがってよかったと思った。
- 医院のほか、いろんなところに奉公に行き、給与は父がとり、フタミにはわずかしき手に入らなかった。母や兄弟にいる自宅に帰りたかった。その家は戦後の粗末なバラック。一間の家でボロ屋だった。
- そのうち、従妹と結婚させられることになり、その家は牛がいて農家だったので、逃げ出した。21歳、田舎には自分の居場所 wasn't なかった。
- 知り合いの散髪屋に紹介され、広島市内に出たフタミは「薬研堀」にある飲み屋の2階に住み込み働いた。その後も島根の麻雀屋にも働いた。やくざにも会ったが、フタミは「1匹狼」と自覚し、関わりをもとうとしなかった。

苦勞の連続 3

- 22歳のときに公務員と結婚して3女をもうけたが、アル中の夫で、離婚をした。3人の子を連れ何度か再婚したが、フタミは夜働き稼がなくてはならなかった。元夫も探してくる。
- このころの私たちは転校も多く、つらい学校生活であったが、勉強も運動もよくがんばる子どもだった。
- 母が夜働いて育った私たちは貧乏だったので大学進学できず、授業料がかからない専門学校に進学した。長女は赤十字の看護学校、妹は歯科衛生士の学校に行き、手に職をつけた。
- 私陽子も妹も上京し結婚して、大学、大学院に進学して大学の教員になった。
- 私は父のことは許せなかった。フタミは自分の人生を台無しにした実父について、晩年、病気で療養した時も亡くなった時もよく面倒をみた。私は実母の「人を許す懐の深さ」を尊敬している
- 母は再婚した夫が亡くなり、群馬にきた。骨折を繰り返し、要介護者になった母。
- 「子が良くしてくれている。今が一番幸せ」と言っている。
- 2026年10月14日に高熱と激しい振戦で、生死を分ける病を体験した。寝たきりになった。私はなによりも母の看病を優先しようとしている。2026年10月18日
- 両方の母の介護は、老年看護学を専門にする自分、子としても大きな試練となっている。